

一度に持つて來た三皿の料理を、一皿づゝに平げたかの洋客の食方を見て、なるほど斯んな處にも國民性の相違が認められるものだなと、少からず興趣を味ひ得たのである。

日本人の飯の食方は、それとは全く趣を異にして居る。一皿づゝ平げて、次の皿に食ひ移ると云ふ食方は滅多にしない。自分の膳の上には幾皿も並べて、彼をはさみ、是をつゝくと云ふ風である。最も近來の宴會などには、始めから御馳走が全部並んで居ることは少く、大抵の場合には、一皿づゝ運んで來るのであるが次の皿を持つて來た時に、前の皿に食ひ残りがあれば、給仕は其儘にして持つて行かないので、食ひ方が運ひ方と平行しなければ、どうしても幾つかの皿や椀が膳の上に居残るのが普通である。稀には殊更に片ツ端から平げて、膳の上を空虚にして、健啖を誇る人もないではないが、誇つて見た處でわが膳の上の淋しさを歎息する位が落ちである。實際日本式の飯の食方では幾つもの皿をゆる／＼と、

己が思ひの儘に賞味する處に、其特色が認められるのである。

和洋兩様の食方は、前述の如く全く其趣を異にして居るが、どちらにも長所があれば短所もある。一皿づゝ始末をつけて次の皿に移る食方は、自分の好きなものを色々楽しみながら食ふと云ふゆつたりした氣分を味ふことは出来ないが、それからそれと一つ宛片付けて行くのは、極りがつき易く、食事の始終がはつきりして居る。幾皿も膳の上に並べて食ふのは、好きなのを多く取つて、嫌なものを残すことも出来、固體の料理を味はつたあと口を椀の液體でやはらげるなど、色々な味を自分で調和して行くことの出来る妙味はあるが、終までだら／＼と極りが付かず、食事時間が意外に長引くのみか、一座の或者は早く食ひ終つても、他がまだ箸を動かして居る爲め、手持無沙汰に、食ひ荒らした自分の御膳と睨みくらをしなければならぬ。上戸に雜つた下戸などは長時間御飯にありつけないと云ふ不便極まる場合もあり、ごうも宴會は西洋料理に限ると、和食宴會の評判が悪くな

るのも、無理はないのである。

一つ宛平げて行く洋式食方は科學的で、幾皿も並べて樂み食する和式食方は文學的であるとも云へよう。比喻が少しく不穩當であるかも知れぬが、洋式は一夫一婦主義であり、和式は一夫多妻主義でもある。凝性な洋式と浮氣性な和式と、それがやがて國民性の特徴ともなつて居るのである。仕事をする上に於ても、西洋人は一つ宛片付けて行くこと云ふ習慣がある。遣りツばなしが少い。個人一日の行事も甲を終へてから乙を始めると云ふ風に運ばれるのは、順序が立つて、物事がすん／＼捗つて行く、謂はゞ總てが事務的である。之に反して日本人は、あれもやれば之れもやる。甲の仕事が終らぬ内に、乙の作業に取りかゝる。右を見て居る目が、何時か左に秋波となり、前に熱中して居るかと思へば、後に氣を取られる。改良も盛にやる代りに、改惡にも中々躊躇しない様に見える。是等はいづれも日本國民性の缺點である。

併し和式食方の美點も日本國民性の長所として現はれて居るのである。昔から日本の文明が色々な輸入文明を按排調和し、之れを咀嚼消化し、其養分を吸収して發育し來つたのも、徐ろに彼を試み是を味ふと云ふ和式食方が國民性となつて取捨選擇の自由を得たからである。然るに時代は急轉して、明治大正の世となり泰西文明の御馳走は、交通機關の發達と共に、矢繼早に食膳に上ることゝなつた珍らしいものなら何でも御座れの日本國民性でも、殆ど箸を下す暇もない位で、二の膳三の膳を据ゑても、並べ切れぬ程御馳走に攻められた。日本國民に取りては食べ方によりては慥に長壽を保ち得べき滋養食料に相違あるまいが、まだ充分新らしい食物に慣れて居ない胃の腑は、是等の珍味を悉く包容し得る程、強く且大きいであらうか。

据膳食はぬは男の耻、限りある廣さのお膳に並べ切れぬ御馳走を食はぬは惜しい、と云つて一々食べ盡すことが出来なければ、どうしても一寸嘗めて見る位で

其御馳走は下げて仕舞はねばならぬ。即ち餘儀なくされて、不自然な洋式食方を文明の取入れにも應用せざるを得なかつたのである。うつかりすると、日本固有の米の飯までも、頑冥食ふに足らぬなどと、捨て、仕舞ふ様にならぬとも限らぬ。泰西文明の御馳走を取入れ、之れを自家の榮養品として、心身を強健ならしめようとするには、どうしても和式食方に依らねばならぬ。それには先以て御膳をもつと廣大にするか、數多くするかして、いくらでも皿を並べることが出来る様に、大國民的食卓を準備すると同時に、一皿ごとによく噛みしめて、自分の口に合ふもの、胃腸に適するもの、滋養に富むものと、それと味ひ分けをしなければならぬ。と云つて徒に和式食方の弱點なる左顧右眄の弊に陥つては、永久に御馳走攻の重圍を脱することが出来ずに終るであらう。うまいと云ふ效能書を見たいので、無暗と食ひ荒らす様では、改造や文化生活などの珍珠も、一箸誤れば、日本國民性を死地に陥れる河豚汁の危険を伴ふかも知れぬ。

毒食は皿までと云ふ諺があるが、まさか皿までは食へないにしても、其意義を別様に考へると、日本風の飯の食方では、皿や其他の食器は、洋式食卓のに比ぶれば、遙に趣味深きものである。其等の器に盛つてある料理に舌鼓を打ち盡した後も、猶陶器漆器の品質や畫模様などに、藝術味を觀賞することが出来る。即ち日本料理は食ふだけが其本領ではない。始めから其色彩の取合せが目を樂しませる様に出来て居る。その御馳走を目と口とで充分賞味した後でも、まだ目を樂しませる色彩が残つて居るのは、和式食膳の特徴で、日本國民性が美術的文學的であることは飯の食方にも現はれて居るのである。

斯様に日本風の食事が、單に食ふと云ふこと計りでなく、觀賞的にもなつて來たのは、茶道の興隆が大なる原因であらうと思ふ。此點に於ては、洋食も支那料理も、大に其趣を異にして居る。尤洋食にも、室内や卓上の裝飾は有るにはあるが、器物その物は、單に食物を盛ると云ふだけで、藝術的趣味には乏しい。多く

は白い飾りのない皿を用ひるのみである。内容の食物は、多少視覚を喜ばせる様にしてはあつたが、それでも和食ほどの注意は拂はれて居ない。支那人の食方に至つては、食ふと云ふことを、唯一の樂みとして割り出されて居るが如く思はれる。それすら、食卓は最初若干の小菜を以て飾られるのである。視覚に快感を與へることが食卓の一要素であるのは、和漢洋いづれの食方にも共通の點であるが、和食にはそれが特に目立つて發達して來つたのである。

食ふと同時に、其器物を觀賞すると云ふことは、日本國民性を一層美術的にしたに相違ないが、同時に食方を個人主義に陥らしめ、共同的から遠ざからしめる様にした。多人數一堂に會食するにしても、各人はそれ／＼専用の食卓、即ちお膳を前に置き、特別の御馳走になると、二の膳三の膳までも占領し、配合よく皿や椀などを其上に並べるのである。此場合、お膳は城廓とも見られる。みだりに他の侵入を許さない。膳の上の數々の御馳走は、確實に占領者の所有に歸して居

るのであるから、多人數集つて居ても、飯の食方は個人主義割據主義で少しも共同的の處がない。洋食は之れに比すれば、遙に共同的である。器物は個別に運ばれるが、それを載せる食卓は共通である。同一卓上で同時に食ひ始めて、同時に終る。何處までも共同的である。團樂的である。支那料理に至つては更に共同的で、一つの器へ全體の箸が運ばれ、同一の目的に向つて共同動作が快く終始されるのである。社交的と云ふ點から云へば、和式食方は最劣つて居る様に思はれる。隣同士の間にも、始めから食卓の城壁が設けられ、器物も食物もお揃ひでありながら、食方は終まで各人勝手に行はれるのである。尤鋤焼や寄鍋などは和式食方としては共同的であり、又近頃はチャブ臺を圍んで、家庭的に食ふことも行はれるが、それ等は少人數の團樂に止まり、一つ鍋を突つつく親しみは、數人以上に及ぶことは出來ぬ。鋤焼などで、安直な宴會が催されぬでもないが、唯鍋臺を並べたと云ふだけで、食方に統一共同的分子は甚少い様である。和式食方が斯

様に共同的社會的でないことは、やがて國民性にも現はれて居るのである。一體に多人數の中で飯食ふよりも、少人數若くは單獨で、ゆつくり食ふ方を喜ぶ傾がある。さもなければ、茶漬に香のものを的に胃の腑へかき込む。食事中他人と話しをしたり愚圖々々して居ると叱られる。其處に大きな矛盾があるが、要するに社交的でない。西洋人になると、千人も入れる様な大きな酒場や食堂の雜然たる物音の中で、それを煩しと思はぬのみか、却つて娛樂の一として、共同會食の一員となつた氣分を味ひつゝ、食事するのである。日本でも牛肉屋や天麩羅屋などでは、多人數雜居で食ふのであるが、それは斯かる飲食店では、止むを得ないことで、その雜沓を樂みつゝ箸を取つて居るお客は殆一人もあるまい。まさか互に敵視もしないだらうが、ごちらかと云へば、睨み合つて食ふと云ふ風である。たまには、隣同士近づきを求めるものはあつても、上戸の同氣相求むると云ふ位で、極稀な例に過ぎない。少し上等な飲食店になると、衝立を以て、お客の一團毎に

國境を作る。廣い共通の食堂でありながら、封建制度が行はれる。牛肉屋でも少し高等なものになると、小座敷を幾つも仕切つてお客の嗜好に投ずる。あの肉屋は室が別々になつて居るからいゝせ、彼處へ行かうと、足は其方に向き易い。

斯んな風に和式食方は、お膳に向ふ時計りでなく、多數會食の場合でも共同的氣分が極めて薄く、個人若くは少數者が夫々城廓を設けて他と全く沒交渉に飲食することは、恰も群雄割據の戰國時代、封建制度の徳川時代の如き觀がある。實際斯の如き時代相と、其等を縮圖した様な風俗習慣と、互に因となり果となり合つて、何時とはなしに國民性を醸成し來つたのであらう。それを思へば、飯の食方の如き、些細な日常茶飯事も、決して等閑に附することは出来ない。御飯最中に話などするなど子供を叱る親も、自分だけうまい物を食つて、妻子や婢僕にはまづい物を食はせて居る主人も、まだく世間に少くはなからう。家族制度の弊害が斯かる處にも現はれて居るとすれば、之を逆にして、日常茶飯事のみとい

やしますに、先づ以てそんな處から改良してかゝらねば、時代の大勢に適應する様な國民性は何時迄たつても作り上げることは出來ぬ。併し前にも云つた通り、和式食方にも長所があることゆゑ、其等はよく／＼味はつて行かねばならぬ。色々と變つた名の御馳走が、文化のころもを着て食膳に上つても、一寸口にしたいだけで、眞ぐお代りをと次の皿に目移りする位なら、始めから手をつけぬがよい。一度箸をつけた上は、靜に味ふの習慣が肝要である。日本古式の食事作法は、此點に於て、今も猶その持味を失はぬのである。

日給から月給になつた日

先輩「僕は不幸にして日給生活の味を知らないから、本日月給に昇格された諸君の感想を承はりたいと思つて、御集りを願つた次第であります。どうか遠慮なく御述べ下さい。」

A 「先生、私は日給から月給になつて、大層肩身が廣くなつた様に感じます。日給の間は、其日稼ぎの土方と同じ様に見られやしないかと、始終氣がひけてなりませんでした。私はこれから折襟の背廣を注文しに參るところで御座います。」

B 「私は此頃病氣を押して出勤致して居りましたが、早速三四日休まして戴かうと存じます。日給の時は一日休みましても、それだけ給料が減りますし、共濟から補助を受けますにしても、貰ふものが全く無くなるのですから、病氣になり

ますと氣が氣でなく、唯もう早く全快しなければとあせる計りで、却つて回復が遅れる様な次第で御座います。少しの熱ぐらゐでは休む氣にはなれません。其日の給料が貰へないと思ふと、内にじつとして居られません。今日からはもうそんな心づかひもなく、軽い内に静養することが出来ると思ひますと、もうすつかり元氣になつた様な心持が致します。」

C 「僕はこれから日曜や大祭日の楽しさが減るだらうと思ひます。日給時代には終日遊んで居ても給料が貰へると思ひますと、日曜の楽しさは何とも云へなかつたのです。月給生活になつても休日は楽しみにには相違ないでせうが、従前よりも其分量が減じはしないだらうかと考へて居ります。勤務日を少し位缺勤しても收入に影響がないとなれば、それだけ休日の楽しさが適切でなくなるのは當然のことゝ存じます。」

D 「私もC君と同感です。授けられた業務を終はつた其日の夕は何とも云へぬ楽しみでした。一日の仕事に對する報酬が明確で、其日の生活を眞實に味ふことが出来ると思へば、日給の有難さをしみ／＼感謝せずには居られませんでした。爲すべき仕事の分量の不足であつた日は日給に對しても濟まぬ様な氣がして、其夜は何となく不快に思れるのでした。反對に充分仕事をしたと自覺し得た日の夕暮は、一層喜びと誇りとに青春の血の漲るのを覺えるのでありました。日給が月給になつたことは、所謂生活の向上で感謝の外はありませんが、其日々の生活の満足を味はふことが出来るかどうかと思ふと、月給生活に入ることは多少不安の様にも感ぜられるのであります。」

E 「吾輩はそんな面倒な考は持つちや居らんです。難有いです、何しろ月給取になつたんですからな。」

F 「月給になつて妻は僕よりも喜びました、両親は妻よりも喜びました。」

G 「私は月給になつたことを衷心から喜ぶと同時に、職務上の責任が重くなつ

た様に感じます。日給生活のときは、終始不安に其日々々を送つて居りました。實際常備の格で社員と名はついても、紙屑を捨てる様に造作なく何時罷められるか分らないと思ふと、のんびりと日々を過ごして行くことが出来なかつたのです。それ又責任も軽い様な氣分が致しました。日給に對してだけ働けばいゝんだ、何も先の御爲めなど考へなくても構はないんだと云ふ様な、無論間違つては居るでせうが、そんな考を持つたこともありません。それが今日月給になつた辭令を受取りますと、私の地位が急に安泰になつたと同時に、仕事の連続性——つまり先の事を考へて其日々の仕事をしなければならぬと云ふことを感得致しました。即ち日給の時よりも、職務上の責任は重くなつたのであります。尤も斯うした考は、日給の時とても當然持たなければならぬのであります。其日稼ぎと云ふ觀念が頭にある間は、つい其氣分になりにくいものと思はれます。若し少し位怠けても又は休んでも、月給には差響がないからなどと云ふ不了見を持つもの

がありましたら、さう云ふ人に對しては日給が月給になつたことは、向上でなく墮落であることは申す迄ありません。」

H「僕は月給になつたことを難有くないとは申しませんが、全體の給與を日割制にすることが出来たら、僕は月給よりも日給に左袒するものであります。或は極端かも知れませんが、上總理大臣より下傭人に至るまで、悉く日給にすることを痛快とする一人であります。これが實行し得られたら、どれ程經費が節減せられ、能率が増進するか恐くは非常なものだらうと思ひます。下級者は出勤時間に遅れること僅に一分でも遅刻として處分せらるゝ場合があるのに、高級者になりますと、殆んど此處分から免れ得ることゝなり、更に高位高官となれば、一日出勤しなくても缺勤にならないと云ふ有様であります。尤も階級の上のものになれば、公務上の來客又は自宅執務等の名目の下に、定刻に出勤出来ない勝になるのは止むを得ないとしても、嚴格な勤務時間と云ふ觀念から云へば、不公平と

申されなくてもありません。これは一例に過ぎないのでありますが、僕は社會の上下を通じて日給觀念を的確に持たせる必要を切に感ずるのであります。併し之れを實行することは、云ふべくして行はれ難きことゝ存じますが、日給が月給になつても、此觀念は失ふまいと私は自ら期して居る一人であります。」

I 「僕もH君と同感です。上下を通じて悉く日給にすることは實に痛快であり全く不可能なことでもあるまいと思ふです。現に南米の共和國ヴェネゼラ大統領カストロ氏は、九年間日給生活をやつたさうです。彼は就職一ヶ月後に時の大藏大臣に向つて、此國はこれまで散々革命騒ぎの持上つた土地だから、何時俸給がフイにならぬとも限らぬ。一月でも働き損になつては困るから、僕の俸給は毎日支拂ふことにして貰ひたい、萬一日給を渡すことが出来なかつたら早速君を首にするからと嚴達に及んで、九年間缺かさずに、毎朝八十磅の日給を懐へ捻ぢ込んでさうです。かう云ふ例があれば、日給制度もあながち不可能ではあるまいと思

はれるです。我々が俸給を受けて居る政府にしても、民間の會社にしても、その財政が不安であつたら、全員擧つて吾カストロ氏と同様な要求を持出すかも知れないです。日給が月給になつたのを喜ぶことが出来るのは、其政府なり會社なり

の財政健全なるを證する一端とも云はれるです。諸君萬歳—。」

J 「吾輩は百尺竿頭更に一步を進めて、時給生活を主張するものであります。時間で働くこと云ふ觀念が、如何に其生活を緊張させるかは、藝者の如き賤業者にも、その夜毎の活動に明かであります。それが大仕切と稱する日給制より聘ばれることになりますと、其活動は著しく弛緩するのであります。更に彼等が旦那なるものを手に入れて、月々若干の手當を貰ふ月給生活に入りますと、見違へるほど職務に不忠實な怠惰者となるのであります。此一例によつて見ても、吾輩は月給生活よりも日給生活、日給生活よりも時給生活を主張するものであります。

先輩「諸君の感想を拜聽して僕も大に得る處がありました。一つお茶を入れま

せう。貰ひものですが、このカステラをあがつて下さい。一片が八十磅と思つて。」(完)

秋の蚊

今宵は十月にしては珍らしい暖い晩だと思ひながら、已に蚊帳も外された長夜の床に就いた。こんなに暖ければ、此冬もきつと凌ぎいゝでせうと、妻の思ひも同じであつた。

二言三言語らう内に、何時の間にかぐつすり寝込んだ。と私は何物にか襲はれた様に不意と目を覺ました。ブーンと蚊の鳴く聲の次第に遠かつて行くのがうつゝに聞えた。此蚊に起されたのだなと思ひくゞ寝入らうとすると、今度は遠くから近くへと聞えて來た。物淋しい蚊の聲が、着陸間際の飛行機の様子に、急に唸り聲高く私の顔に迫つた。私は思はず手で拂うと、すいと逃げて行つた。暫くは静寂な夜半に復つたので、少し覺めかゝつた臉を強ひて塞いだが、意地悪い蚊は直

ぐ攻勢に轉じて來た。私の眼はもう暗黒の中に冴え切つて仕舞つた。さうしていつもの様に、敵が顔の城壁に肉迫するのを待つて、一舉に之れを仕止めるべく息を殺して居ると、蚊は果して鼻の邊に止まつたらしい。御參なれど、平手でしたゝか吾れとわが頬に打つけた。併しどうしたものか、今夜は折角の犠牲打も凱歌を奏することが出来なかつた。蚊は早くも身をかはして退却し、残るは頬の痛みだけであつた。小癩な蚊の振舞かな、此度こそは逃すまじと、再び夜着の塹壕に身構へたが、蚊の先生一向やつて來ない。待ちあぐんで手を引込めると、又やつて來る。手を出すと逃げる。今夜の敵は中々手強い。それにしても叢爾たる一匹の蚊に五尺有餘の五十男が醜弄されるかと思ふと、もう癩でくたまらない、ごうかして退治して仕舞はふと色々あせつて見たが、從來の作戦より外に名案はなかつた。

蚊は屢々襲うて來たけれど、「いつも、此時晚く彼時早し」を繰り返すに過ぎな

かつた。私はもう肉體の一部を之れ以上に犠牲にするに忍びなかつた。一層のと電燈をともして積極的攻勢を取らうと考へたが、ふと窓のブラインドを通じて淡い月の光に照らされて居る妻の寝顔を見ると、僅一匹の蚊の爲めに大層な振舞をして、さも心地よさうな彼女の夢を驚かす氣にはなれなかつた。で、もう一度氣を落ちつけて蚊の兵力を偵察して見たが、矢張蚊は確に一匹より居ないことが解つたときに、私は微弱な敵の喊聲の爲めに、どうしても寝付かれない様な腦の意氣地なさを、吾ながらつくづく憐んだ。

併し物は考へ様一つだ。いくら大きくても、一匹の蚊が吸ふ血の量は知れたものだ、吸ふ丈け吸はせて遣れ、それが安眠を得る捷徑であると悟て見た。さうして直ぐ實行した。けれど此悟りはまだ餘りに科學的であつた。我慢はしながらも蚊が顔の上に止まつて居ることを意識すればするほど、其局部は千鈞の重さで壓される様な感じがして、痒さを覺える迄もなく追ひ拂はざるを得なかつた。眼は

ます／＼冴えて来た。と私の頭にふと斯んな口合が浮んで来た、蚊が食ふと思へばこそ頭が科学的になつて仕舞ふのだ。何か知れない或物がブーンと来て食ふと考へたらどうであらう。ブーンが食ふ——文學、さう聴きなせば、蚊が食ふのも文學的だ。物事は見様によつて科学的にも文學的にもなるのだ。一つ蚊が食ふと思はずに、ブーンが食ふと、文學的音樂的に觀じて見よう、と、ほんの他愛ない考ながら、さすがに會心の笑みを浮べて居ると、何となく頭が柔らいで来る様に覺えた。蚊が食ふのではない、ブーンが食ふのだ、科學ぢやない文學、さうだブーンが食ふのだと口の内で繰り返して居る間に、蚊の聲もどうやら遠ざかつて行く様な心持になつて来た。

其儘寢て仕舞つたらしい。驚いて目覺めた時には、もう朝日がブラインドの隙間から洋服戸棚の鏡戸を照らして居た。顔の上の古戰場には、敗戦の感じが夢の跡ほごも残つて居なかつた。それにしてもあんなに勝誇つた蚊はあれからどうした

だらう。室内はまだ昨夜の儘で迷路はない筈だ、遠くは行くまいわが血の仇、引つ捕へて目に物見せんと、枕から頭を擡げて四圍を見廻はした。と、間近な壁に一匹の蚊がぬく／＼と止まつて居るのが直ぐ目に入つた。しかもその蚊は滿腹の血汐で丸々と肥つて居るではないか。此奴だ、散々人間を愚弄した上に、抵抗なき安眠をいゝことにして、よくも斯んなに吸へるだけ吸つたものだと思へば、今更ながら腹立たしく、いきなり平手の一撃を加へた。が及び腰で狙ひが外れたと見えて、蚊は横飛びに辛うじて重圍を脱した。けれど身おもの彼れは遠くは飛べなかつた。

もう生かさうと、殺さうと彼の運命は全く私の掌中に歸したのだ。斯うして覇者の地位に立つて見ると、見つともなく太つた彼れの姿が如何にもいぢらしくなつて来た。生き残つた秋の蚊の短い生涯にも、思ふまゝ生の満足を得て、唯其當然の死を待つて居るのだ。敵ながらも今は血を分けた仲ではないか、此儘逃して

其壽を全うさせてやらう。血は貴くともほんの一滴にも足りないほどの小さな犠牲だ。之れを壁上に汚して何の益があらうと思ふと、もう私の胸には怨みも何も消え果て、振り上げた拳は、徒らに早く逃げよとばかり、蚊を追ひ立てるのであつた。

私は立つて窓の戸をあけてやつた。壁を傳ひ、窓の縁を辿り、やうく飛び去つた蚊の行方を暫し見送つて居たが、私は何かなしに名残が惜まれてならなくなつた。

「與へた血だ」と私は思はず獨語した。

朝の光にいきくした青い空から、清らかな秋の氣が襟元へと流れ込んで來た。

集 終

昭和三年十月五日印刷
昭和三年十月十日發行

【非賣品】

著者 木戸 忠 太郎

京都府上京區土手町夷川上ル

印刷者 内外出版印刷株式會社

右代表者 須磨 勘兵衛

京都府下京區河原院七丁目

不 許
複 製

發行所 達 磨 堂

京都市上京區土手町夷川上ル

終

